

陳景富 編著『草堂寺』（修訂本）の私訳

望 月 海 淑

はじめに

この本は、鳩摩羅什訳の法華經の書写碑を建てようということが発議され、実行に移された時に、私は「從地涌出品」の碑の寄進を申し出て、その除幕式の時に草堂寺の住持から戴いたものである。この本は282頁にわたる長部のものであるが、今回ここに掲載するものは、その中の一部で草堂寺と鳩摩羅什の伝記にかかわるものとの私訳である。それは「一、草堂寺的建立、沿革」の中の「1、寺院建立の歴史背景」と「2、古刹伊始及逍遙園、草堂寺弁」と、「二、鳩摩羅什及其中国文化的貢獻」の中の「1、入関前2、非虚度的十八年」のものである。もちろん中国語に不案内であるので、これは文字通りの私訳であり、間違いなどもあるかもしれないが、ご寛容をお願いしておく。

一、草堂寺的建立、沿革

1、寺院建立の歴史背景

佛教はいつ中国内地に伝入したのか、諸説は様々である。ただ現在一般には漢の哀帝の元壽元年（BC 2年）に、博士弟子景廋が大月氏王の使いの伊存より口受され、浮屠經が開始された。桓帝の世には、安世高がおり、支憺等が洛

陽に来て訳経をした。但、皆到来したばかりで、「旧訳は時に謬あり」といわれ、「深蔵は隠没して未だ通ぜず⁽¹⁾」といわれた、故に東漢の朝にあっては、佛法は度をこして方術の一種の存在であるとの見方がせられていた。三国の時代になり、孫呉に支謙・康僧会、曹魏に曇柯迦羅等の専門がおり訳経工作に従事した。永平（AD58－75）より建安（AD196－220）年間に、佛経は約二百九十三部が共訳された。専ら是の如くだったが、佛典翻訳中の文義には多くの間違いもあった、故に魏・晋の時代に朱士行は西行しウデンにおいて真経〔原本〕を求めるための挙にでた。西晋の時代には、事情あり進んで一步の発展を見た。この間、經典三百三十三部が共訳され、僅かに洛陽の一地点にはすでに佛寺が四十二ヶ所に存在していた。まさに佛図澄が石勒に投じ、北部地方にて宣化した時、後に赴いた先で沢山な人々に更に受け止められ、「沢山な佛が奉安され、皆は寺廟を造営し、相競って出家をした⁽²⁾」と示されている。佛教は一種の外来文化となり、自ずと時が流れて魏・晋の時代に入ると、すなわち民間に流行し、並びに中国固有の文化即ち儒教と、道教の学説とも相い接触し、お互いに交流し、お互いに吸収しあい、三教の合流開始の歩みが起こった。言い換えれば、佛教の「中国化」の進展が開始されたのである。

ここに重要な意義の起点上のものがある。僧・俗両方面で、等しく幾人かの代表的人物の出現があり、彼等の努力もあり、佛教の「中国化」の歩みが増し、従って中国文化事業の発展となり、磨滅すべからず貢献を作りだした。

僧界方面の代表人物は、道安と鳩摩羅什である。梁啓超先生は、かつて経を評価し他のものより優れているとし、「我が佛教界をして一道安を失わしめた、盛大な大国たりうるのかどうか、吾は蓋をし敢えて説かざるなり。佛教に道安あり、殆ど歴朝の創業期には、一名相を得て、しかして後、開国の規模を具するようなものだ。」「鳩摩羅什は弘始三年より長安に至り、逍遙園に訳経場を設け、後、僧八百をあまねく集めて、九十四部四百二十五巻を訳経した……訳経籍したところは、亦、多くは大乗の性空を發揮し佛学の主旨とし、大乗佛

学をして中国にあっての成長の先機を開いた、大乘佛学はこれより中華に広まり、中国思想史上にあってだけでなく千古を照耀するもので、即ち、世界佛教史上にあって、亦、一枝独秀の局面となした」（現代佛学叢刊・大乘思想影響中国佛教芸術）。

鳩摩羅什は《草堂寺》の中心人物で、ここに留まった後、後の衆に詳述した。道安（AD312～385年）は、本の姓は衛氏、常山扶柳の人である。年七歳にして、書を読み再覧すると能く誦した。年十二で出家し、神性聡敏であるが、姿や貌は甚だ醜かったので、師の重んずる所とはならず、田舎に駆役せられて、三年となった、勤めに就いて就労したが、曾って怨色はなく、篤信に精進し、斎戒にも欠けることがなかった。数歳の後、師に申して経を求めた。先ず五千言、次いで万言、これをいだし田に入り、因息就覽、暮れになると即ち暗誦をした。師は大いに驚いて、これを敬異し、後に戒を受けさせ、その遊学を思うままにさせた。AD335年の後期、邺（今の河南省の安陽）に入り、佛図澄に師事した。澄は道安を見て嗟嘆し、終日ともに語った。衆はその形貌を見て褒めなくて、ことごとくが共に少し危ぶんだ。そこで澄は曰った、「この人の遠識は、汝等の仲間ではない、」と。この事によって澄を師となした。道安は澄の講經には毎回随い、確實なる解によって紛糾を排除した、行いには余力があったので、故に世人は「漆道の人、四隣を驚かす⁽³⁾」と語った。AD354年の前期、太行の恒山において寺を立てた。AD357年、冀部に還り、都寺に住持し、徒衆は数百人であった。たまたま冉閔の乱に遇った後、山や沢に潜遁し多年をすごした。後、また渡河し陸渾にあり、山に栖み木を食し、専ら意は修学につくした。AD365年、慕容をさけて河南し、道安はこれより徒衆を分散して、南の襄陽に身をよせた。居ること十五年、しかして後に長安に赴き、七年を経て入寂した。それ河北におる時、九回も居を移したが、安寧にとどまるといういとまがなかった、但、素から佛教を弘めることを以て自任し、部屋で不断に講じ、経を注することに甚だ勤めた。《高僧伝》巻第五の所載には、「安は經典を

究覽し、深を引き出し遠を致す。その註釈するところは般若・道行・密迹・安般諸經に及び、文を尋ね句を比べ、起尽の義のために、疑いを分析して解を選別すること、凡そ二十二卷、序は淵富を致し、妙は深旨を尽くした。條は叙を貫き、文理を会通し、經義は克明なのは、安より始まる」と。襄陽に居った年、秦と燕との交兵に乗じて、荊の襄は少しく不安定であった、鑑みるに「經が来たことやや多く、軋經の人の名字を弗となし、後の人はこれを追尋しても、年代を推測することはなかった」、道安はこれを「総じて名目を集めて、その時と人とを表し、品の新旧を説明し、經録を撰び、衆經を据えるに實力によった⁽⁴⁾」と。これと同時に、又、僧尼の規範を創り、佛法の憲章として、條の三例を示した。一に曰く、行・香・定座・上經・上講の法、二に曰く、常日に六時に行道し飲食の時に法を唱えること、三に曰く、布薩差使悔改等の法、であった。天下の舍寺は、遂に則ちこれに随った。道安は長安に至った時に、早くも古稀の年を迎えたとも、但、依然として法を宣べることに志を立て、訳事を奨励し、曾って西域の沙門の曇摩難提等の訳出した衆經百余万言を請うた。又のち、沙門の法和とともに音字を詮定し、文旨を詳しく検べ、新出の衆經はこれによって正しく獲るようにした。総じてこれを言えば、道安は傳教の訳經にあって、教理を發明し、佛規を改定し、經典等の保存の面では、均しく甚大な功績があった。それは訳經の規模、人才の培養で、後に来る鳩摩羅什の訳經にたいして最も重要な影響を遺した。

佛經は中國に着いてから、時がたつにつれて、宣講、翻譯がなされ、佛法は広く地に浮かぶように流傳が起った。佛法はこの社會の中で、人心尊崇で、便利さを越えたこの要求自身、更に大きな發展となった。この種の実現は更に大きく發展し、高僧・大徳の出現はもとより、重要な条件であるが、但、この決定性の条件を忘却してはいけない。所謂、「國主に依らず、則ち法の事柄は興り難い」とは、高僧・大徳は説明するに、只、すでに崇佛があり、又、能く「任賢」の國君の部下の才能もあり、充分にその博學才器の發揮となった。道

安と鳩摩羅什とは正しくこのような國君に遇到した、彼等（國君）は便ちこれ前秦の苻堅と后秦の姚興とである。

苻堅（AD338～385）、字は永固、一名は文王、ほぼ陽臨謂（甘肅省秦安東南）の氏族の人である。初め東海王となり、AD357年にその兄・苻法等と宮中に入り、暴君の苻生を殺し、自ら大秦王と称し、永興と改元した。他に謀臣・王猛を執政として任用し、国事を思いど通りに強くした。先に前燕・前涼・代國を攻滅し、北方の大部分の地区を統一し、又、東晋の益州をも奪い取った。その武功は自ら説くまでもない。文治方面にあっては、自ら帝と称した初めて、即ち「廢職をもとに戻し、絶えた世を継ぎ、神祇を礼し、農桑に課税し、学校を立て、勞働力なく寄る辺のないもの・寡夫・孤高のもの・高い年齢のもの・自存することの出来ないものらに、穀物や布を賜った。その殊才は異った行いであり、孝友忠義であり、徳業は称されるべきで、所在はもって聞かしめた」。特別に強調に値すべきは、「廣く学校を興した」この一点である。この学校の学生は各郡國からやって来て、条件は至って少なく「通一經」のみである。公郷以下の子孫、業を受けるために派遣され、その学は儒に通ずるとなし、才はただ事に堪え、清修にして廉直であり、親に孝で兄弟仲良く田を耕す者は、皆、これを表彰した、ここに於いて「人は勉強を勧めることを思い、号して多士と称した」。他は親にしたがい太学孝士を訪れ、その経義による優劣により、定品の順序とした。禁裏を守護する軍士らにも、「皆、修学せしめた」。后宫の役人、典学の係、内司の人々、奥庭を手入れする人、去勢された人及び女の奴隸すべて識ある人を撰び、博士を置き、以て經を授けた。

事実の説明だと、苻堅は一にすでに崇めている儒と、博儒の君王をおいた。同時に、本人は少数民族の出であるので、これに加えてその祖・苻洪、その父・苻雄、又、すべてはこれ後趙の石虎の部下とした、これ「佛はこれ戎の神で、正しく奉ずべきところなり」という思想の影響であり、心理上にあって佛法に對しても親近を倍加し、崇拜するようになっていた。⁽⁵⁾

僧に竺法朗あり、少くして長安に遊び、野菜を食べ布をまとい、志は人はずれであった。後、泰山に居し、隰士・張忠とともに遊処し、金輿の谷瑞山に精舎を設立し、百余人のものが模倣したので、苻堅はこれに対して極めて感服した。道安は襄陽において経を講じ、疏を注し、塔を造り、佛像を鑄造し、僧規を制定したので、苻堅は遠くから礼を尽くした。AD379年、苻丕を遣わして襄陽を攻め落とさせ、遂に道安及びその好友の習鑿齒を長安に迎え入れ、自らこの役の功を僅かに「一人半」を得た、といった。その中で道安を一人として、習鑿齒は半人だとしたが、道安を重く見たことを知るべきである。長安にあって、苻堅は更に道安に敬重を加え、内外の学士に勅を発したが、道安を師とすることに皆は疑いをいただき、乃至、「学んで道安を師となさず、義は難の中にはあらず」の語は、時の諺となった。初めて長安に到った時、道安は便ち僧の純なる言葉から鳩摩羅什の高名を知っていたので、その後、苻堅に会うごとに羅什を迎えることを勧めた。AD384年になり呂光は命を受けて亀茲の西伐に出かけ、羅什を送り届けるという一事にかけた。しかし、苻堅は未だ羅什が到着するのを見ずして、國は亡び自身も死んでしまった、しかし羅什を迎えようということは、これより始められた。

姚興（AD366～416）は、字は子略、羌族の人、AD394年から416年まで在位、16國の後期において多くの君主の中でより優れた才能一位の人であった。苻堅と同じように、たいそう儒学と佛教とを重視していた。姜龕、淳于岐、郭高等はすべて当時の碩徳であり老儒者であり、長安におり教授であり各各数百人の弟子があった、遠近からの学びに来る者はたいそう多かった。姚興は政務の暇な時に、常に姜龕を召し東堂にいたり経論と芸を講じさせたが、総じて明理に弁じた。洛陽にまた胡を弁ずる者あり、儒学を講授し、弟子は千余人、関中よりすすんで出掛け講義を請う人がたいそう多かった。姚興は関尉に命令を下した。「諸の学んとする者は道を求め、芸を探求し、己を修め身も励め、往来出入には、常に期限に拘泥することなかれ」⁽⁸⁾と。ここに於いて学者はこと

ごとく励み、儒風が盛んになった。もし、鳩摩羅什が迎えられ入関し佛教を説いたとしても、以外にも苻堅の心願は未だ定まっていなかった。ともあれ、姚興はすなわち徹底して事柄を妥当に処理することになった。早くも姚萇の嘗時に、鳩摩羅什の高名を聞くことによって、すぐに虚心に迎えることを請うた。ただ姑蔵（即ち涼州、今の甘肅省武威）に勢力を張っていた呂隆等は「什の智計・多解をもって、恐らく謀をなすので、東に行くことを赦さない」とした⁽⁹⁾。姚興は即位してから、便ち弘始三年五月に隴西公頡徳を派遣し西のかた呂隆を伐たせた。ついにその年の十二月二十日をもって、鳩摩羅什は姑蔵より迎えられ長安に入った。ここに至り、国主の全力支持と高僧の怠らざる努力のもと、佛教は大いに栄え、「中国化」の道筋に入り、草堂寺はこの一事業についての勃興地となった。

2、古刹逍遙園の始まり及び、草堂寺を弁す

関にある草堂寺の建立の時間と逍遙園、西明閣との関係については、長い昔から、撰史を志す者にはすこぶる詳しい研究が欠けており、これにより出現について多くの錯乱を許している。そこで特に略考をして、分別してこれを以下のように記す。

まず、草堂寺・逍遙園・西明閣は同一の所在で、異なった時代の別称であるのか、あるひはこの三箇所は違う地点にあったのだろうか？

宋の敏求の《長安志》の記載によると、「逍遙栖禪寺があったのは、（戸）県の南三十里、後秦の弘始三年に置かれた」とある。又曰く、「姚興は常に逍遙園に諸の沙門を引き連れ、外国の僧に鳩摩羅什が佛経を講演するのを聴かしめるために、逍遙宮を造った。宮殿の庭には左右に樓閣があり、高さは百尺、相離れること四十丈、太い麻縄をもって二つの樓上の頭に結びつけた。会日には、二人の人をしておのおの樓内より出させ、縄の上を行かしめ、以て神と佛に相遇うとした」とある。明かなことは、《長安志》によると逍遙園は即ち草堂寺

であり、逍遙宮は寺内にある、と。清代の乾隆帝の四十一年に畢沅所撰の《關中勝迹圖志》に載せられているのは、「栖禪寺は鄂県の東南四十里の圭峰の麓にあり、一統志は姚秦の逍遙園の遺跡である」とある。この段の記載は再び明白に説き得て過ちあらず、みだりに解釈すべきではない。日本人の足立喜六がAD1926年に出した定稿の《長安史跡考》には、関の記載は実際上の内で《長安志》の復録である、⁽¹⁰⁾とある。この外、草堂寺に現存している古碑の中には、但、およそ寺院の沿革問題を談じたものがあるが、概括して草堂寺は即逍遙園であると認めているようである。例えば。

宋の乾徳四年（AD966年）二月十五日撰写の《重修建福禪院之記》の記載には、故院主和尚あり、乾寧年間に、宝智禪師と「逍遙麋寺に遊ぶ、これは羅什の訳経の所であり、宗密が疏を造った園でもある……」⁽¹¹⁾とある。

宋の天聖八年（AD1030年）八月二十五日に立てられた《大宋京兆府鄂県逍遙栖禪寺新修水磨記》の碑載には、「長安邑戸に逍遙精舍あり、即ち後秦の三蔵法師什公の訳経の地である、この寺名は勝れたものを標し、終南山に相對し、況や草木は以て靈奇があり、嘗て高僧が間をおいて出たところなり」⁽¹²⁾とある。

金の元光二年（AD1223年）十二月に立てられた《草堂弁正大師奥公僧録塔銘》の碑には、「逍遙の秦觀、勅賜の道場、千載にして唯一である」と示されている。

清代の雍正十二年（AD1734年）に立てられた《勅封大智圓正経僧禪師僧肇碑記》に載せられているのは、「臣等は恩命を蒙り、秦瓠を巡撫す、例せば経旨によるこんでしたがうべきで、僧肇は勅封の名号を所得し、恭しく扁額を懸け、もって盛典を彰し、開かれた寺は経恩寺と名付けられ、大殿をもって大智宝殿となした。地方官に命じて黒衣の僧を集め、吉を相談し祭をいたし、靈鷲山の妙音を演べ、竜宮の清風を放ち、銀鼓を宝坊にとどろかせ、金輪香地に転じた。逍遙園内は、仰きみれば花の雨がひるがえり、軒が林中に連なり、さらに梅檀の気が布かれている……」とある。

乾隆三十三年（AD1768年）重修草堂寺碑の記載には、「稽はそこに始まる、即ち昔の逍遙園なり、晋の安帝の元興十二年（案ずるに、元興の記載であるが、この年号は三年までであり、十二年説は実は二年の誤りで、時は秦の弘始五年で即ち AD403年で、この説示は錯誤である。）姚秦の三蔵法師鳩摩羅什の訳経の所なり」とある。

以上の歴史的記載の碑銘の影響により、世人も亦、これにより異口同声である。子細をを知らずに「異口同声」という、それ実にはここに問題がある。

関に逍遙園ありというのを調査すると、草堂寺の記載で、最も早くは梁の慧皎の《高僧伝》である。この書の中の《羅什伝》の記に曰く、羅什は迎えられて関に入った後、「姚興は国師の礼をもって遇し、甚だ寵愛せられ、……什すでに至り止まり、すなわち請われて西明閣及び逍遙園に入り、衆経を訳出した。……姚興は佛道を以て意をそそぎ、その行いは唯善で、信は苦から出るのを良き渡し場とし、世を御するを鴻則とし、故に意を九經に托し、心は十二部經に及んだ。すなわち三世の論に精通し、もって因果をつとめて示したので、王公以下の人々は揚げられた風を敬服・賛辞した。大將軍の常山公頭、左軍將軍の安成侯は嵩く並びに篤く縁業を信じた、しばしば羅什に長安大寺において新經を講説することを請うた⁽¹³⁾」。ここで説く所の「大寺」とは、即ち草堂寺の前身である。この段の引用文を見ると、逍遙園、大寺、西明閣の三箇所は不同の所であるが、同一地点の異った時の別名であるとまとめることが出来るのではなかろうか。それらの間では顕然として無統属の関係である。

これに対して隋の費長房の《歷代三寶記》巻八に載せられているものは、亦、佐証すべきである。「鳩摩羅什婆は秦言では童壽といい、弘始三年の冬に常安（即ち長安）に到着し、秦王・姚興は厚く礼遇を加えた、すなわち西明閣及び逍遙園の別館に招き住まわされた……姚興はすでに虚心に佛法を崇仰し、恒に大寺草堂の中にて三千の僧を供え、什とともに新旧の諸經を参定し、精究せざることなく、その深旨を洞察した、⁽¹⁴⁾」と。まさに説くべし、《三寶記》は実に

自ら《高僧伝》の説を採る、故に所載は無二で一致している。

どうして、逍遙園は究竟の什がおった地点であるというのか？

一般情理を案じていえば、姚興と鳩摩羅什とは新たな好誼が結ばれ、国師と称せられ、殊更な礼をもって待遇され、総じて一度も会わず、初めての到来ながら「貴賓客」として、皇宮から遠く離れた地方に安置された。如何に況や、彼等は毎回「相對すれば語り、則ち終日長く留まった。僅かなことでも尽くして研究し、則ち窮年倦むを忘れた」⁽¹⁵⁾と。結果、もしも遠く離れた皇宮の地方に住したというのは、実に不便である、如何に況や姚興はこのような國君であり、国政を投げ捨て顧みないようにならずとも、ひたすら佛法の中にはまりこんだ。これによって以て断定すべきであり、鳩摩羅什は初めて来たり、逍遙園（西明閣）に脚をとめ休息したが、そこはきっと都城の附近の離宮の別館であった。歴史の記録で一步を進め証実して、このことの正確性を推断した。

鳩摩羅什の門人に僧叙がおり、彼は《大品經序》の中で、「弘始五年、癸卯の歳の四月二十三日、京城の北の逍遙園の中にて、この經を出す」⁽¹⁶⁾と示している。これによると逍遙園を「京城の北」に位置づけている。又《大智度論序》に載せられているのは、姚興は「京師に義業の沙門を集め、公卿・賞契の士五百余人に命じて、渭濱の逍遙園の堂に集めて、天子の車に駕り大きな水辺において、御息を禁じ林間を警め、自ら玄章を攬き、梵本と考正し、要弘に諮通し、土地を平らにし来やすくした」⁽¹⁷⁾とある。これ則ち逍遙園に「渭濱」があったとはっきり言うことが出来る。《冯志》、《三輔決録》、《関中記》、《雍録》の記載にもとづけば、漢代の長安城は高祖・劉邦の七年（AD200年）に建てられ、始めは狭小なものだったが、惠帝劉盈の時になり更にこれを築きあげた。ここは本は秦の離宮で、渭水の南にあり、渭水を隔てて西北斜めに秦の咸陽宮と相對していた。後、趙の石虎が曾って修復して、苻（秦）、姚（秦）、西魏の宇文は皆ここを都とした。これは据え置き、則ち上来の文「京城之北」の中の京城は、即ち漢の長安城である。王國維の《水經注校》（《水經注》とい

う一書、この作者は酈道元である）は、渭水の流れの向きを描き述べて、渭水と沔水は瀋水と合流した後、又、東北に流れ渭城を経て（文頤は故咸陽となす）南し、沔水がこれに注ぎ、又、東の長安県の北を過ぎ、また東し沔水と津枝と合流する。津枝の水は沔水の水を受け、東北に流れ鄧艾祠の南を経て、又、東し二水に分かれ、一水は東し逍遙園、注藕池に注いでいる、池中に台観があり、蓮の葉が浦を被っており、実に秀れた遊び場であった。その一水は北の渭に流れる。ここは特別に注意を要する場所で、津枝は二つに分かれた後、逍遙園のどこに入っているのか、これらの流れは渭水と同じで、あたかもこれは渭水と「京城」の間で逍遙園に注ぎ入る。故にこの園の位置は渭城の北とすべきで、亦、渭濱と定めるべきである。両説はすべて誤謬なし、只これを何に対して不過とし、不同だと言うか、まあいいでしょう。

晋の愍帝の建興元年（AD313年）、劉曜使・趙染は精騎の五千を率いて長安を襲った、庚寅の夜、外城に入り、……龍尾及び諸の兵營を焼き払い、千余人を殺し奪い取った。辛卯の早朝、退き逍遙園を屯所とした。⁽¹⁸⁾唐の初め釈法琳あり《破邪論》の中で、亦、「渭水は逍遙苑を防ぐ」としている。劉逵の《西漢長安》という一書の附図《漢長安城平面示意図》では、長安城と渭河の間には「藕池」があると標示している。この藕池は南で厨城門に対し、西北では漢の渭橋に対し、正しく渭水と長安城の正中である。ここでの藕池は当初は逍遙園の藕池であった。その方位はこれ「渭濱」に符合し、「城北」の説である。此によって以て結論を出すことが出来、すぐに初唐に至り、世人はすべて逍遙園は城北の渭濱であると知っている。逍遙園と草堂寺とは但一回事に属さず、且つ終南山の圭峰の下にあるのではないか。只、これは中唐以降のことになり、おおむね旧時の逍遙園は復た存在しなかったのではなかったのか、そこで羅什の訳経の草堂寺の一带をさして逍遙園となし、これより《宋高僧伝》の道氤伝は伝を止めるべし、神楷伝の中で、以てこれを考証すべし、としている。この時の逍遙園は又「南逍遙園」、「終南山逍遙園」と称し、以て渭濱、城北の

逍遙園とは区別している。

第二の問題はこれ、草堂寺の創建は何時の代で何年なのか？

上述の引用文の影響によって、一般的定論では草堂寺創建は、鳩摩羅什が入関した年、即ち AD401年のことになる。もしもこの指摘によるならば草堂寺の創建は、則ち遠く離れたものではないだろう。もしもこれによると草堂寺の前身は即ち「大寺」だと言うことになるが、則ち尚、斟酌を加えるべきである。

《高僧伝》巻第十一の慧嵬伝の記載には、嵬は「何処の人なるかを知らない、長安大寺に止まり、戒律の行が澄み清らかであり、多くは山谷に栖み、禪定の業を修め、……後、晋の隆安三年、法顕とともに西域に周遊し、終わった所を知らず⁽¹⁹⁾」とある。案ずるに晋の隆安三年は即ち後秦の弘始元年（399年）である。二年が過ぎた時に、鳩摩羅什は姑蔵より長安に至っている。この前にあって、大寺は早くも世に存在し終わっている。同書巻六の僧習伝には又、記載がある。習は「若くして出家し、長安大寺に止まり、弘覺大師の弟子となり……童壽が入関してより、遠くから僧たちが集まり、僧尼もすでに多く、よって僧主等は綱領を設けた、僧正の始めは、自ずと習である。弘始の末に長安大寺で没した⁽²⁰⁾」とある。童壽が入関の時、僧習はすでに六十歳を越えていた。「若くして出家した」というが、十年を以て論じて、則ち大寺は最も遅くても四世紀中葉には、すでに建立されたとなる。鳩摩羅什の到来に比べて早くも半ば、多世紀がたったというのだろうか！大寺が始めて建立された年代は、これが是か否かは進んで推測すべきであるが、事は無考に属するので、敢えて妄評せずにする。

「草堂寺」この名前の由来は、まさに《歷代三寶記》巻八に所載の如く、即ち「世に大寺と称するが、これは本名ではなく、中樞の一堂、草の苫を以て縁とするもので、即ちその内において……佛典を翻訳した⁽²¹⁾」とある。但、是は後秦の時期に整えられたものであるが、すべて「大寺」の一名を使用しており、正式な使用の「草堂寺」の名の時間については、後に出された多くの意見と比

較してみる必要があるだろう。

再び次に、西明閣の問題である。《高僧伝》《歴代三宝記》は均しく記して逍遙園となしており、大寺以外の別の一箇所としている。湯用彤先生は則ち《智度論記》の中で認めて、それは逍遙園内の逍遙宮殿の前の左右に二閣あり、その一は「或は即ち西明閣か」、となしている。考証によっては無処である、これについては暫くは疑いを残しておく。

鳩摩羅什の佛經訳出の地点の説明によると、おおよそは「弘始三年より七年まで、什は多く逍遙園に住在しており、八年以降は則ち大寺に在った」。只、これはその概略について言ったもので、実際上は、鳩摩羅什が長安におった十三年中で、その他の地方には住在しなかった、この一点にとどめて、再詳述を待つことにする。

《魏書・釈老志》の記載には、北魏の孝文帝の太和二十一年（AD497年）五月、詔ありて言う「羅什法師は五歳で神出したといわれ、志して四行に入る者なり。今も常住寺にはなお遺地があり、敬服し悦んで足跡を修め、遙かに追慕の情は深く、旧堂の所において、三重の塔が建てられた。又、王が昏虐を強いるのに会い、道のために軀をなくした、すでに暫くは俗礼と同じ、まさに子胤あるべし、推訪すべきを以て聞き、まさに官位を叙し加えるべし」と。この段の記載により説明すれば、以下の三つの問題がある。（一）最晩にはここに至りもとの大寺はすでに「常住寺」と分出している。（二）寺内に建立された三重の塔（即ち佛塔・或は卒堵波と称する）は、或は鳩摩羅什の舍利塔で関にある。（三）鳩摩羅什は確かに曾って納室に生子あり、この事は謬伝に非ず。

南北朝が起こってより、佛教は中国にあって更に迅速な発展を加えた。魏の末に至り（AD534年）、魏の都の洛陽には一千三百六十七の寺があり、天下には三万有余の寺があり、僧と尼の人数は二百万を数えた。佛の經典の流通は大いに中国に集まり、およそ四百一十五部、合わせて一千九百一十九卷であった。又、造像の一項については、龍門・雲崗を以て最大とし、その余に岩を掘った

り・彫刻したものなどが多く、その数は計り知れない。これは「法雨普及」の時期であり、草堂寺は迅速に拡大発展した。故に《歴代三宝記》の記載には、「魏の末・周の始め、衢街やや整い、大寺は四伽藍よりなり、草堂の本名は即ち一寺となり、草堂は東常住寺、南京の兆王寺（後、安定國寺と改められた）安定國は西の大乗寺となった」とあり、四寺はもとは一体であり、範囲は広大で、中に「天街」があり、天街の東は畦、八隅には井戸があり、「即ち旧大寺の東厨では三千の僧の甘泉⁽²³⁾を供した」とある。今日の草堂寺の東南一里ばかりで旧寺があり、「常興寺」という。南三里ばかりで李家岩山上に又寺があり、「興龍寺」という。興龍寺の西一里ばかりで、紫閣峪口の杜家の庄に「大圓寺」がある。この四寺の方位は《歴代三宝記》の記載にかなり似ている。しかして以後に現れる名の興福塔院は公共の和尚墳墓の地である、故に前述の四寺と後述の四寺とは関にあり、但、古相より今に至るを論ずるを要しないし、中間に多くの興廢があったかもしれない。

ここに至って、草堂寺の位地はすでに定まっている。あの時に草堂寺の山門は北に開け、今日の寺門は南に対し紫閣とは正に相反している。証拠は三つある。鳩摩羅什の舍利塔の上の八角の宝龕は北面に刻文が「姚秦の三蔵法師鳩摩羅什舍利塔」と十三文字あり、塔の正面の説明は北に面している、これは山門に応じたもので、正殿と同じ方向である。《関中勝迹図志》に「草堂烟霧」という一福の図があり、山門もまた北に面している。最後に、習慣を以て、情理にそって言うと、塔院は山門の前に在るべからず。この後、北周の孝明帝の武成年間（AD559～560年）の初めに、天竺の憍陀羅國（ガンダーラ）の名僧の闍那崛多が長安に来たり、草堂寺に止まり、周の孝明帝によって重きを置かれた。⁽²⁴⁾

隋朝の一代には、歴史の記載が欠略しており、寺の事も宣べられてはいない、唯、《唐高祖為子祈疾疏》の碑が世に遺されている。この疏碑には隋の煬帝の大業二年（AD606年）正月八日刻とあり、石は一尺四方ばかりのものである。

おおよその経歴に因って、唐・宋・遼・金の数代の、原刻の文字は消えて明白ではない、故に元代に寺僧が重刻したが、字体は良からず。経《金石萃編》の作者の確量は、碑石の高さ一尺六寸五分、広さ一尺四寸、共に九行、毎行は九字、行書と記している。碑石は戸県草堂に向かっているとあるが、今、調べてもこの石は見つからない。堂堂鄭州刺史の跑大老は子の祈福のために遠くから来たり、隋代の草堂寺の香火は旺盛であり、佛事も盛んで、影響は小さくはない、と見られたと示している。

二、鳩摩羅什と対中国への文化的貢献

1、入関前

鳩摩羅什は、漢語にて「童壽」と訳す。その祖父の名は達多で、古インドの王室の大臣であり、行いは孤高をきめこんでおり、洒脱で群れをなさず、名声は國で高かった。父の名は鳩摩炎で、性格は聡敏で、道徳は高尚で、まさに位を嗣ぐべき人であったが、辞し避けて出家し、葱嶺を越えて東におもむいた。西域の龜茲國（今の新疆の庫車）の国王はその徳行を聞き、非常に敬慕し、親しく自ら郊外に至り迎接し、請うて国師とした。龜茲の王に妹がおり、字は耆婆、年はまさに二十歳、見識あり悟く明敏で、ひろく読書し、目にしたことは忘れず、一度聞けば即ち誦し、付近の諸国はさかんに礼をつくして招請したが、均しく拒絶を被った。耆婆と鳩摩炎はともに心を傾けなかったが、但、最後には婚配を迫られた。久しからざる後に即ち鳩摩羅什が生まれた、父母の名前を兼ねてとって名付けられた、故に鳩摩羅什は又の名を「鳩摩耆婆」と称した。これによって知るべし、鳩摩羅什の身は兩族の血統を兼ねると雖も、但、実には龜茲の臣民に属しており、所謂、「天竺系の人」という説は不正確である。

耆婆は鳩摩羅什を生んだ後、便ち出家を意欲したが、但、いまだ鳩摩炎の許

可が得られなかった。久しからずして、又、弗沙提婆が生まれた、これは鳩摩羅什の弟である。耆婆は一次郊外に遊んだ中で、墓が群をなしているのを目撃した、枯いた骨が地に遍く敷かれ、更に加えて人生の大苦である生死を認定し、只、出世を欲して苦から去るのみあるとし、涅槃に到達せん、才能あり衆苦から解脱するは、極楽につきると。ここにおいて必ず出家を要する誓願を立てた。もし許さざれば、彼女は髪を剃り尼とならんと、便ち飲食を絶った。六日が過ぎて氣息えんえん、危機は目前に迫った。鳩摩炎は執拗に譲らず、只、同意を得よとした。耆婆は出家の後に「禪法を楽しみ、専ら精み懈怠するに非ず、」終に初果を学得した。鳩摩羅什は七歳、母に随って出家し、一度、開始するや便ちまれに見るような記憶・理解能力を現出した。「日に千偈を誦し、偈には三十二字あり、およそ三万二千言なり。阿毘曇を誦し、すでに過ぎ、師よりその義を受け、即ちおのずから通達し、無幽にして伸びやか成らざるなし。」このようにして他日に成じて高僧大徳となり、大翻訳家としての先天的な条件を得た。よって什の母の身は王の妹であるから、國の人々で財を施し供養する者は甚だ多かった。但、佛徒として講究し苦行し静修した。ここにおいて什の母は鳩摩羅什の九歳の年に、便ち帶着し龜茲を離れ、國の人の利養を辞避して、あまねく歩き道を問うた。

鳩摩羅什は母に随って龜茲國を離れ、南に辛頭河を渡り、罽賓に到着した（位地は今の克什米爾一帯で、唐の時には迦濕弥羅と称され、ここは釈迦牟尼の滅度の後に佛教が盛んになった土地である）、即ち名徳の盤頭達多を拜し師とした。この人は国王の従弟で、学識は淵博で精深で、大きな度量あり、独り歩きの當時、三蔵九部、訓練せざるものなく、朝より昼までに、手で千偈を書写し、昼より暮れまでは、亦千偈を誦した、名声は諸国にひろまり、遠近の者はこれを師とした。鳩摩羅什は雜藏、中・長の二阿含經、凡そ四百万言を受けたが、みな佛教の小乘經典であった。盤頭達多是鳩摩羅什の非凡で聡明な才智を見て、彼を「神俊」と称した。又、到着して国王の面前で外道の論師を折伏

した。国王は鳩摩羅什に対し、これに由り更に敬仰をし、「日給に鵝（がちょう）腸詰めの一雙、うるち米、麴を各三斗、酥六升」与え、「所住の寺僧の大僧の五人、沙弥（年幼和尚）十人、住まいの掃除人、若干の弟子をあたえた⁽²⁶⁾」。これにより罽賓国王からの給与は外国から来た客僧の最高となり一等の待遇であり、その尊崇を受けたさまを見るべし。しかして、鳩摩羅什はこの時、十歳或いは十一歳に過ぎないで、尚、童稚の年であった。

鳩摩羅什は年十二で、復、その母に随って亀茲にかえった。沿道の各国では皆、高官・厚録を以て招聘したが、但、鳩摩羅什は動ずるところがなかった。母子の二人は終に月氏を通過して、進んで疏勒に至った。疏勒の国王は一には本国の僧人を勉励し深く佛教を研鑽させ、二にはこれを使って亀茲と好き交わりを結ばんとして、大会を設け、鳩摩羅什に座に上り《転法輪經》を説くことを請うた。結果として、亀茲の国王はこれを認め、疏勒の国王は亀茲の僧人を尊敬し、この尊敬をその國の主にも向けさせ、これに因って重ねて使いを疏勒に使わし「その親好に酬いよう」とした。疏勒にある期間、鳩摩羅什は主に二つの件事をなした。

一、説法の余暇を利用するをもって、多方に外道の經書を尋訪し、善く吠陀・含多論を学び、多くの文辞・制作問答等を明らかにし、又、四吠陀の典及び五明の諸論、陰陽の星算を必ず尽さざるはなく、吉凶に妙達し、言は符契（割符）にしかず。鳩摩羅什は小節に拘わらず人を卒いて達せしめた。疏勒の沙門は学問・道德に対して懷疑があった、但、鳩摩羅什は専心に志をたて、一如すでに往き、道を問うことを怠らなかった。この知識は鳩摩羅什に対し、猛虎に翼を添えたようで、その説法や弘道を増加し吸引力をそなえ、その日の後、訳經に更に応手を心得させた。

二、小乗より大乘に転習した。疏勒に在ってたまたま莎車王子・須利耶蘇摩に会ったが、これにより鳩摩羅什は弘道上にとって転機をもたらされた。須利耶蘇摩及びその兄・須利耶跋陀は人に國を委ねた後、出家し和尚となり、一緒

に莎車より疏勒國に到来していた。その中で、蘇摩は才能・技能が絶倫であり、専ら大乘を以て教化し、その兄及び諸の学者は皆共にこれを師とした。鳩摩羅什も亦それと親好するようになり、規範としてこれを奉った。後來、蘇摩は鳩摩羅什のめに《阿耨達經》説いた、經中の大意は「陰界の諸々は皆空・無相である」、として「因は無実なり」の道理を宣揚した。鳩摩羅什はこの時に小乗佛教の「有眼根」に執着していたが、この經・無多の大意義を認めたために、これを把握し小乗の諸法をすべて破壊しさった。蘇摩は進んで他の説に對し、「きみの眼中的諸法はその実は真實の有にはあらず」と説いた。鳩摩羅什は蘇摩が講ずるところのものを反復し研究し、まさに「理の帰するところある」を知り、ついに専ら方等（方等部）に従事し、説いた。「我が過去に学んだ小乗は、像についてこれ人の金を識らず、鑿石を把らえ、これ東西の最好のものなりと認めていた」と。したがって後に即ち廣く義要を求め、《中論》、《百論》、《十二門論》等々の誦を受けた。ここに至って鳩摩羅什は、小乗佛教の崇信から大乘佛教の広弘へと轉換し完成させた。

鳩摩等什は疏勒にあり多少の時間をすごしたが、歴史は明白に記載をしてはいない。唯、知られているのは疏勒を離れ温宿（今の新疆の阿克蘇西温宿県）に至った時に、「二義相檢」という意を以て、反発は論破し了ったと大ぼらを吹く一人の道士がいた。そこで（鳩摩羅什は）「声滿葱左、誉れは河外に宣ふ」と説いた。帰国の後、即ち大乘經論を廣く弘めた。王子の支持下にあって、方等經の奥義を開き、「諸法は皆空・無我といい、陰界を分別し、仮名は非実なりと推弁した」といい、会うものは個個に、「悲感追悼し、悟りのおそきを恨む」と説いた。⁽²⁷⁾のち又、卑摩羅叉より《十誦律》を学び、新寺に停住すること二年、《放光經》及び諸大乘經論を習誦した。（龟茲）国王はために金の獅子座を造り、それに上り説法することを請い、「諸王は長くかたわらに跪座し、什をしてこれに登らしめ」、となった。それに連なった闍賓の師の盤頭達多や前から他学を習っていたものに伝えた。まとめて説く。「和尚はこれ我が大乘

の師、我はこれ和尚の小乗の師たり」と。これよりの後、亀茲國はついに大乘佛教をもって天下を統一し、そのまま鳩摩等什の入関に至って、まさに衰落を見た。

この間、鳩摩等什は二十歳の年に王宮で受戒をした。この後久しからずして、什の母は辞して天竺へ赴いた。出発の際に、鳩摩等什に対して説いた、「大乘の教義は奥深い、その真趣を闡明にし、それを把握し伝えひろめるために東土へ行くがよい、貴方は肩の上にこれを担って行くべきである。過ちなきように、あなた自身にとっては一利もない、どのように弁えられますか？」と。鳩摩羅什は答えて説いた、「大士の風格はまさにここにあるべし。所作所為は、皆他人を利するところにある。只、大法をよくとどけ流伝させるを要す、世人の汚れた心を洗淨するには、その佛智を開悟し、その上で、即ち危険に会うとしても、遺恨なからん⁽²⁶⁾」と。鳩摩羅什の後半生は、この誓言を正しく好く実践することであった。

2、非虚度の十八年を開く

前に述べたように、前秦の苻堅は一級の儒教と佛教とを同時に尊ぶ君主であった。中国の北方を統一した後、心あり漢を継いだ後に重ねて西域を計営した。正にこの時にあり、西域的車師前部の（今の新疆・吐魯番一帯）王及び亀茲王の弟と一緒に来朝し、西域は珍奇なものを多く産出するといひ、苻堅に派兵し平定することを請うた、求めについて内諾した。建元十三年（東晋の太元二年、AD377年）正月、太史奏して言わく、星あり外国分野にあらわれる、まさに大徳智人あり中国に入補せんとす。次ぎに、苻堅は西域に鳩摩羅什あり、東晋の襄陽には釈道安ありと聞く、故にもって「瑞に應ずるべし」といった。ここに於いて使いを派遣しこれを求めたが、但しいまだ願うが如くにはならなかった。建元十七年二月に至り、鄯善王、前部王は再び兵を西伐に出すことを請うた。苻堅は一は国勢の伸張のために、二は鳩摩羅什を迎え取るために、終に建

元十八年九月に、驍騎將軍・呂光を派遣し、陵江將軍・姜飛將・前部王及び車師王等と、七万人の兵を率いて亀茲及び烏耆の諸國の西伐をさせた。出発に臨み、苻堅は呂光のために建章宮で餞別の宴をはり、特別丁寧⁽²⁹⁾に説いた。「朕は西域に鳩摩羅什ありと聞く、かれは深く法相を解し、善く陰陽を改めたと、後学の規範のために、朕ははなはだしくこれと思う。堅人哲人は國の大宝なり、もし亀茲に克つならば、馬を駆けさせて什を送れ、⁽²⁹⁾」と。呂光軍が出発して久しからずに、即ち亀茲を破り、その王・白純を殺し、王の弟の白震を立てて主とした。呂光は鳩摩羅什を獲得したが、馬で京に送れとの命令に遵わなかった。これは「年が尚若いように見えた」からだった。ここにおいて凡人は様々と手をつくしてからかい、漫然と軍中においた。⁽³⁰⁾呂光軍は涼州に至り、便ち自ら涼州を領し刺史となり、護羌校尉となったが、次の年に、苻堅が姚長によって殺害されたとの消息が伝わって来た。時にAD385年で、呂光が出征してから（當年、亀茲に克つ）すでに二年が過ぎていた。故に苻堅は國破れ身亡び、いまだ鳩摩羅什と相談することはなかったが、実に咎は呂光にあった。

前秦亡んだ後、呂光は再び東に帰らず、且つ東晋の太元十一年（AD386年）涼州に止まっており、使時節待中、中外大都督、督隴右河西諸軍事大將軍・匈奴を領護する中郎將・涼州の牧・酒泉公と称号した。後又、自ら立って王と称し、建元太安、歴史家は後凉と称した。後又、王穆を敗り、酒泉を取り、三河王と称号した、時に東晋の太元十四年（AD389年）だった。数年の後、又、克枹罕が、その子の呂覆に命じて高昌の鎮守とした。太元二十一年（AD396年）に大王と称し、龍飛と改元し、百官を分封した。これより後秦の弘始三年（AD401年）に至り、呂纂あり呂紹を殺し、呂隆は呂纂を殺し骨肉の争いにわずかに残った。総じて短命の後凉であった（歴十六年）、連年の戦争で、民には安寧の日はなく、道路は障害物で塞がれ、東西を旅する商人は、難行せしめられた、一つの話では何もまとまらず、佛法弘揚の条件も備わらなかった。呂光本人は鳩摩羅什の態度に对待し、佛法を尊崇せざることを知るべきであり、

鳩摩羅什の弘道創造の条件を上において談ぜざるは自然のことであった。詳しくいえば、鳩摩羅什は涼州に停留することの十八年間に、只「蘊其深解、無所⁽³¹⁾化」であった。但、ここでは説かず、鳩摩羅什はこの間、只これ虚度の光陰、收穫烏有、であった。その末、鳩摩羅什はこの時期にいくらかでも習ったのではなからうか？また入関前後の活動を貫き来たったことを分析するに、確かめずともその中の大概は明白である。

初に先ずこれ語言の学習であった。鳩摩羅什は西域にあること四十年、主要な精力は佛教の大小乗の經典及び外道の研習に用いて、従来、今までは只、片言であっただけである、語を読み漢語を学習するという問題であった。自然と、漢と西域の両者の経営を経て、龟茲一帯にはすでに漢人がおったが、諸々の屯田兵のように、俄に留守になるなどであり、但、人数はそんなに多くはないが、沢山な当地の民族との融合もあったが、能く漢語を説くとなると更に寥寥たるものであった。西域語言の海洋の中にあって、漢語は或いは埋没しかねないような一滴にすぎなかった。しかれども鳩摩羅什には東の土地に法を弘めようとの志あり、それを把握し一門の技術を作り発掘し掌握することは、重視しようとしても得られないことだった。これに因って以て肯定すべきである、その時の鳩摩羅什は尚いまだ漢語に通じてはいなかった。しかし、長安に至った当年、能く経を訳出し、又やや後、気兼ねすることなく「方言未だ融⁽³²⁾けず」であり、但、却って以て「口に秦言を宣べ、漢と西域の両訳は異音であり、文の主旨をもって交⁽³³⁾弁した」であった。この種類の比較は熟練の運用で、漢語・工具の技能は、これ何が時候を掌握出来たということなのだろうか？答案は只、能くこれ一つあるのみ、什は姑藏にあった。第一の記憶力あり驚人的な学者であった、当地の漢民族の人々の中に入り込んでおり、十八年の時間はどのようにしてか成就に達したのだろうか、これについては譬喩的にしか言えない。ここに因って、完全に以て説くべし、十八年の言語の訓練の中に没し、鳩摩羅什は長安におること十三年（AD401～413年）の中で、恐らくこのような大いな貢献

をしでかしたのか想像することも出来ない。

その次は道を弘める説法である。呂光父子は佛法を重視しなかつたといえども、但、亦、佛法に反対することもなかつた。鳩摩羅什をこのような第一位の虔誠の高僧としたが、しかりと雖も環境条件では差をおいていた、但し、要はその間は日常的な宗教生活を停めていた、これは想像も出来ないものであった。鳩摩羅什は入関の時に、すでにの佛像を背負ってきた、又、胡の梵文の經書をも帯びて来た、この年里にあって、必定して時時に研習し、限りある人々に対しては弘伝した、その中の一は後に現れた鳩摩羅什門下の「四聖」の一位といわれた僧肇である。この外、胡藏からここにいたる地に鳩摩羅什が經を講義し法を説いた遺跡があり、即ち今日も存在する鳩摩羅什の寺塔の所在地である。ありていに言えば、この塔は始めは唐代に建立され、AD1934年に再建され、武威県城の大北街にある。塔は八角十二層で、高さ七十二米である。基礎の塔の四周にはレンガを積み重ね、花の模様のある欄牆がある。低層・三・五・八層とに門が設けられ、門は東に向いて開いており、最上層には小さな龕があり、各層の角の屋根は反り返っており、その下には風鐸があり、塔の頂には葫蘆の宝瓶があり、遠くより望み見ることが出来、巍峨として高く聳え、氣勢は廣く偉大である。伝によると、この塔は鳩摩羅什がおった当年に弘法の地として建立されたものである。胡藏の地理は偏り狭いが、東西の交通は頻繁であり、戦争を阻むところとなる。「国王」は又、奨励せず、鳩摩羅什のその時の弘法活動に影響は大ならずして、これについてはばかつて言おうとはしなかつた。

再び次には外道の知識の実践応用である。上文のように、曾って鳩摩羅什は疏勒におった時に提唱し尋訪し、外道の經書を研習した一事である。姑藏に至った後、戦争が頻繁に起こったために、人には寧日がなかつた、鳩摩羅什は能くその繰り返す雑事の形勢の中で、「凶に逢いて吉に化す」と、自己を保存し、機会を待ち、東土に弘化するという実現を宿願とした、故にとりわけ実用性の外道を具えることを重視した、特別には五明中の工巧明と、医方の明、因明等

の理論、技能の実践と応用であった。《高僧伝》と《晋書》の「羅什伝」は均しく以下の数事を談じている。⁽³⁴⁾

一、入関の途中で、呂光軍は山の麓で宿営したが、鳩摩羅什はこれを不可と認め、「徒軍隴上」といって勧め、則ち必ず「狼狽」を見るところとして否定したが、呂光は聴かなかった。晩になって大雨が降り、山から洪水が起こった、水深は数丈で、呂光軍の数千が溺れ死んだ。二、呂光軍の遭難の後、鳩摩羅什は又説いた。「ここは凶亡の地である」、久しく留まるべからず、軍を動かし数力所に配置すべし、とすみやかに言って帰った、予言の中途に「必ず福地あり、そこに留まるべし」と。軍が姑藏に至った後、苻堅が殺されたとの結果を聞いた。呂光はこの地に留まり王と称して建国した。三、呂光が開国した年に、姑藏は大風が吹いて止まなかった、鳩摩羅什はこの風は不祥であるといい、まさに奸人の反乱がある、しかれば「勞せずして自ら定めるべし」といった。久しからずして、梁謙・彭晃が相次いで反乱したが、皆殄滅された。四、呂光は龍飛二年（AD397年）に、張掖・臨松・廬水の胡・沮渠男成及び従弟の蒙遜が反乱して、建康の太守・段業を推して主とした。呂光は庶子の呂纂を派遣し、五万の兵を率いてこれを討たせた。時論は認めるている、段業は間違いなく烏合の衆であった、しかして呂纂は素から声望があった、兵出れば必ず能く反乱軍に克つ。これについて呂光は専門に鳩摩羅什の意見を問うた。鳩摩羅什は説いた、「この行いはいまだその利を見ず」と。久しからずして、呂纂は予想通りに合黎に敗績した。継いで郭馨の乱があり、呂纂に大軍を委ね、軽しく還えったが、復、郭馨のために破られ、自身は亦、身を以て免れた。五、呂光の朝廷の中に中書監・張資がおった、呂光が所重していたものである。張資は病で、呂光は一切を尽くして弁法を給い医治させた、すると外国の道人・羅叉がおり、自ら張資の病は治るべしと称し、呂光はこれを丁重に礼し治療を請うた。鳩摩羅什はそれを聞き張資の病は治らないと認めた、しかし羅叉は誇りからこれを詐りだと口にした。結果、羅叉は予想通りに無能で力もなかった、「僅かな日で張

資は亡くなった」。六、呂光が死んだ後、呂纂は呂紹を殺し自立した、鳩摩羅什は予言した。「必ず下人が上を謀るという変がある」、宜しく「己に克ち徳を修め、以て天戒となすべし」と。呂纂は聴かなかった。鳩摩羅什はついで又「胡奴の頭將が人の頭を切る」と暗示し、呂纂は小心で用心をした、但し呂纂は又悟らなかった。後、呂光の甥の呂超（小字胡奴）が果たして呂纂を殺し、その兄・呂隆を立てて主とした。

以上の六箇条の原文叙述の中には多くの巫トとの混ぜあわせ、方術の色彩があり、但、いささかな神奇の現象の中で、鳩摩羅什が天文を運用したと確かめもせずに看出したものがあるが、歴算、医学、論理等の方面の知識の分析進行あり、推理、判断などについて、往々に「料事如神」と、能く言われた。ついでに一説、鳩摩羅什が長安に入った後、姚興はその博学多才を賛め、唯「法種」が絶えることを恐れ、便ち伎女数人を賜った。ここにおいて衆僧の多くはこれを真似て、妻を娶り乱れた。これは顕然たるもので、僧人は妻を娶り子を生ませることを許さないという戒律に相い入れないことだ。この事の処理は妥当なところであるとして、鳩摩羅什は針を聚め鉢に盛り、諸僧を集めてこう言った。「もし能くこの食を真似るものあるならば、乃ち室を蓄えるべきことである」と、説き完って、「短剣を挙げ針を進め、常食と別にしなかった、諸僧は羞じて乃ち止む⁽³⁵⁾」。その実、鳩摩羅什は非真の食をなんで針にしたのか、これは衆のために一種の魔術を使ったもので、只、これは他の手段・熟練によって、「愚僧」等に見せ止めさせることにあった。この「吞針」術は又即ち外道の一技である。これは一方面より再次にわたり鳩摩羅什の確かな「博通」を証明するものである。鳩摩羅什は胡藏にありし時に該博な外道の知識、熟練の技術をもたれ、廣く「神通」を顕わすことにより、人の信を取り、災難を避け禍を去り、乱世に身を処し、終には良き機会の到来を待ち、最後には一番の事業を成就した。

後書き

鳩摩羅什が法華経を訳出した場所は、草堂寺であると現在なされているが、逍遙園・大寺など様々な記述があり定かではないというべきであろう。これは長い歴史の隔たりがあり、その上に中国の歴史の中で転変があったこと、長安が都でなくなったこと等、様々な要因があるのであろうが、只、鍵を握っているのは草堂寺に鳩摩羅什の墓があるという一時においてのみのようである。

尚、この書の中に出てくる、「馮志・三輔決録・関中記・雍録・関中勝迹図志」については、未見である。田舎におり定年退職した身としては、上京しこれらを調べる時間も体力もないからである。ご寛容を願いたい。

註

- (1) 『高僧伝・第五卷・釈道安伝』大正・五十巻・351下～354上。に詳しく、ここでの引文もほぼその通りに載せられている。それによると、道安は早くに両親を失い、外兄孔氏に育てられたらしく、色が黒かったので漆道人と呼ばれた。尚『高僧伝』は、南北朝時代に梁の慧皎の編集。（横超慧日・『羅什』19）
- (2) 『晋書下巻・佛圖澄伝』（百納本二十四史中）5622、には、天竺の人、永嘉4年に洛陽に来た、又、少くして学道妙通し、毎夜読書ともあるから優れ人であった。更に「澄試以道術澄即取鉢盛水燒香呪之須臾鉢中生育蓮華花」とあるから道術もよくしたらしい。その中に「百姓因澄故多奉佛皆營造寺廟相競出家」とある。
- (3) 『高僧伝・第五卷・釈道安伝』大正・五十巻・351下。
- (4) 『高僧伝・第五卷・釈道安伝』大正・五十巻・352上中。
- (5) 『晋書下巻・載記第十三』苻堅上、5743上、5744下、5747下。
- (6) 『高僧伝・第五卷・釈道安伝』大正・五十巻・351下～353上。
- (7) 『高僧伝・第五卷・釈道安伝』大正・五十巻・354上。
- (8) 『晋書下巻・載記第十七』姚興上、5773上。
- (9) 『高僧伝・第二卷・鳩摩羅什伝』大正・五十巻・332上。尚、この書では、姚興は國師の礼をもって侍り、甚だ優寵した、とある。
- (10) 足立喜六『長安史跡の研究』p 109・110。「長安志」巻五を引用して、逍遙園の旧跡である、としている。
- (11) 詳しくは「京兆府重修清涼建福禪院之記」で、『草堂寺』258・9に記載あり。

- (12) 詳しくは「大宋京府戸県逍遙栖禪寺新修水磨記碑」で、上書の244。
- (13) 『高僧伝・第二巻・鳩摩羅什伝』大正・五十巻・332上中。
- (14) 『歴代三宝記・第八巻』大正・四十九巻・79上。
- (15) 『高僧伝・第二巻・鳩摩羅什伝』大正・五十巻・332上。
- (16) 『出三蔵記集序・巻第八・大品經序・第二・長安釈僧叡』大正・五十五巻・53中。
- (17) 『出三蔵記集序・巻第十・大智度論序・第十九・釈僧叡』大正・五十五巻・75上。
- (18) 『資治通鑑・八十八巻』16 b。
- (19) 『高僧伝・第十一巻・釈慧暹伝』大正・五十巻・396中
- (20) 『高僧伝・第十一巻・釈僧習伝』大正・五十巻・363中。
- (21) 『歴代三宝記・第八巻』大正・四十九巻・75上。
- (22) 『魏書・釈老志』今は塚本善隆著作集（第一巻）に依る、42。
- (23) 『歴代三宝記・第八巻』大正・四十九巻・75上。
- (24) 足立喜六『長安史跡の研究』には、「圭峰の北麓は昔の逍遙園であるが、今は草堂營といふ荒果てた寒村に過ぎない。…今の草堂寺は極めて隘少で、僅かに本堂と二僧房が一人の貧僧によって守られて居る。僧は土地を耕作したり、村落に托鉢したりするのみで、嘗て誦經梵鐘の聲は聞こえない」とある。p 109・110
- (25) 『出三蔵記集・第十四巻』大正五十五巻・100上中。『高僧伝・第二巻・鳩摩羅什伝』大正五十巻・330上・中等。尚、このことに関し、『羅什』の中で著者・諏訪義純氏は、炎に人目惚れしたのは奢婆であり、王が炎に迫って妻とさせたとみるべきである、(118・9)と述べている。
- (26) 『高僧伝・第二巻・鳩摩羅什伝』大正・五十巻・330上中。
- (27) 『高僧伝・第二巻・鳩摩羅什伝』大正・五十巻・330下～331上。この書には、「この道士は迷悶自失稽首帰依」とある。
- (28) 『高僧伝・第二巻・鳩摩羅什伝』大正・五十巻・331上。
- (29) 『高僧伝・第二巻・鳩摩羅什伝』大正・五十巻・331中。
- (30) 『高僧伝・第二巻・鳩摩羅什伝』大正・五十巻・331下。尚、同書には「強妻以龜茲王女。什耻而不受辞甚苦到」とある。尚、『出三蔵記集伝・第14巻101上』にも同様な記述がある。
- (31) 『草堂寺』には、この語は『高僧伝・鳩摩羅什伝』にあるとされているが、該書には「深解法相善閑陰陽」331中とあり、これは『出三蔵記集伝第十四巻・100下。』に同じ記述がある。
- (32) 『出三蔵記集序・伝・第十一巻・百論序第三・釈僧肇』大正・五十五巻・77中。
- (33) 『出三蔵記集序・巻第八・大品經序・第二・長安釈僧叡』大正・五十五巻・53中。尚、湯用彤『漢魏兩晉南北朝仏教史』には「羅什持胡本、興執旧經、以相考校。其新文異旧者、皆会於理義統出諸聖並諸論三百余卷今之新聖皆羅什所訳」p 292

陳景富 編著『草堂寺』（修訂本）の私訳（望月海淑）

とある。

(34) 『高僧伝・第二卷・鳩摩羅什伝』大正・五十卷・331下～332上。

(35) 『晋書下卷・晋列六十五・鳩摩羅什伝』（百納本二十四史中）5626下。